

日本労働社会学会『通信』

v o l . XVIII, no.7(2006年9月)

日本労働社会学会事務局 (第18期)  
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1  
都留文科大学社会学科 田中夏子 (たなか なつこ)  
tel.0554-43-4341 fax.0554-43-4347  
e-mail: natsu@tsuru.ac.jp

★ 恐れ入りますが学会費の納入は、現金書留ではなく、下記の口座までお願い  
します。

学会HP:<http://www.jals.jp>

◆郵便振り込み口座番号

00150-1-85076

「日本労働社会学会 村尾祐美子」

◆銀行振り込み口座番号

東京三菱銀行 大塚支店

普通 口座番号 1519051

「日本労働社会学会 会計 村尾祐美子」

◆年会費 学生・院生会員→6000円 / 一般会員→10000円

---

目次

I. 日本労働社会学会大会開催のご案内

1. 大会開催校から
2. 大会プログラム
3. 交通のご案内
4. 会場付近のホテルのご案内

II. 関西研究会報告

1. 日系ブラジル人労働者の就労経路と生活スタイル —— 滋賀県長浜市の事例  
近藤敏夫・長光太志  
コメント 小松史朗

2. 「飯場労働者の労働への意味づけ: 建設産業における構造転換の中の下層労働」  
渡辺拓也  
コメント 高橋 伸一

1. 大会開催校から

「会員各位 2006年9月5日 日本労働社会学会 第18回大会事務局 大梶 俊夫  
日本労働社会学会第18回大会開催のご案内  
前略

2006年10月13日(金)～10月15日(日)の期間、第18回大会を開催いたします。  
会員各位におかれましては、万障お繰り合わせの上、ご出席くださいますようご案内申し上げます。つきましては、大会準備の都合上、お手数ですが、同封の葉書にご出欠などをご記入の上、9月20日(水)必着でご投函いただくようお願い致します。  
草々」

2. 大会プログラム

日本労働社会学会 第18回大会プログラム 2006年10月13日(金)～10月15日(日)

第1日 10月13日(金) 工場見学: 日本水産株式会社八王子総合工場

13:10 京王線・北野駅改札集合 (歩いて日本水産へ)

13:30 工場見学

16:00 北野駅にて解散

17:00 幹事会 (創価大学本部棟2階M206教室)

第2日 10月14日(土) 自由論題報告～(本部棟2階M205教室)

10:30～11:50 自由論題報告(テーマ:医療・福祉労働)

11:50～14:20 総会・第3回日本労働社会学会奨励賞受賞者発表  
(昼食を含む)

14:20～15:40 自由論題報告(テーマ:労働組合)

15:40～17:00 自由論題報告(テーマ:労務管理)

17:30～19:30 懇親会(本部棟13階カフェテリア)

第3日 10月15日(日) シンポジウム(本部棟2階M205教室)

10:00～12:05 シンポジウム「労働調査を考える:90年代以降を見るアプローチを巡って」

12:05～13:00 昼食

13:00～15:30 総括討論

会場 創価大学 会場校ホームページ <http://www.soka.ac.jp>

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236

TEL:042-691-2211(代表)

大会事務局担当 大梶 俊夫(創価大学文学部社会学科)

TEL:042-691-4518(研究室直通)

E-mail: [okaji@soka.ac.jp](mailto:okaji@soka.ac.jp)

### 3. 交通のご案内

■八王子駅へは新宿からJR中央線、あるいは京王線(私鉄)で約40分です。また東海道新幹線の新横浜駅から、JR横浜線で約45分です。

■創価大学行きバスの乗り場は、京王八王子駅前が番、JR八王子駅北口前がか番です(午前10:29までは番、それ以降は番です)。バスの運賃は300円、所要時間は約25分です。

■会場のある本部棟へは「創価大学行き」のバスに乗り、終点の「創価大学」で下車すると便利です。創価大学正門前を通るバスの方が本数は多いですが、正門前のバス停から本部棟まではキャンパス内を15分くらい歩く必要があります。詳細は郵送資料を参照。

■タクシーを利用すると、八王子駅前より約1700円、所要時間は15分です。キャンパス内を本部棟まで入ってください。

■車で来られる方は、本部棟西側の滝山駐車場(有料)をご利用ください。

### 4. 会場付近のホテルのご案内

JR八王子駅ならびに京王八王子駅周辺のホテルの一部紹介

┆八王子プラザホテル┆

東京都八王子市明神町4-6-12 TEL 0426-46-0111 FAX 0426-46-0004。

京王八王子駅徒歩1分。JR八王子駅北口より徒歩6分。

無線LANブロードバンド対応(無料)。

┆京王プラザホテル八王子┆

東京都八王子市旭町14-1 TEL 042-656-3111(代表)。JR八王子駅北口前。

┆マロウドイン八王子┆

東京都八王子市三崎町6-11 TEL 042-623-7111 FAX 042-623-6380。

JR八王子駅北口より徒歩3分。

┆八王子スカイホテル┆

東京都八王子市八日町2-3 TEL 0426-23-1100 FAX 0426-23-3247。

J R中央線「八王子駅」徒歩8分。ブロードバンド無料。

｜シーズイン八王子｜

東京都八王子市寺町43-2 TEL 0426-25-0051 FAX 0426-25-3051。

J R八王子駅北口より徒歩5分。

｜三恵シティホテル八王子｜

東京都八王子市寺町60-1 TEL 042-622-3388 FAX 042-622-1553。

J R八王子駅北口より徒歩4分。

｜京王八王子駅前ホテル｜

東京都八王子市明神町2-25-4 TEL 0426-42-9111 FAX 0426-45-6391。

京王八王子駅から徒歩2分。J R『八王子駅』北口より徒歩7分。1泊¥4500～。

｜千代田ホテル｜

東京都八王子市旭町4-1 TEL：042-624-3281 FAX：042-624-3282

JR八王子駅北口より徒歩2分。

｜八王子ホテルニューグランド｜

東京都八王子市大和田町6-1-6 TEL 042-645-0015 FAX 042-646-5674

京王八王子駅より徒歩9分。

※ 「創価大学」行きのバスは、JR八王子北口および京王八王子駅の両方から出ております（京王八王子駅始発）。

※ ホテルによっては、駅に戻らなくても最寄りのバス停から「創価大学」行きのバスがある場合がありますので、ホテルに確認して下さい。

## II. 関西労働社会学研究会報告

関西労働社会学研究会が（2006年春・通算第9回）以下のように開催されました。当日の報告の「報告要旨」と参加者の「コメント」を併せてお知らせします。

2006/9/1

事務局 立命館大学 辻勝次

仏教大学 高橋伸

一

開催日時：2006年6月24日（土） 午後1時から6時

開催場所：立命館大学衣笠キャンパス・修学館・1階・第2研究会室

### 報告者と報告テーマ

1. 日系ブラジル人労働者の就労経路と生活スタイル ——滋賀県長浜市の事例  
佛教大学 近藤敏夫・長光太志
2. 飯場労働者の労働への意味づけ：建設産業における構造転換の中の下層労働  
大阪市立大学大学院 渡辺拓也

### 報告要旨

1. 日系ブラジル人労働者の就労経路と生活スタイル ——滋賀県長浜市の事例  
佛教大学 近藤敏夫・長光太志

#### (1) 長浜市への転入・転出経路と就労状況

日系人を雇用する派遣業者は地方の製造業が盛んな地域に多い。長浜市の日系ブラジル人の就労ルートと転職ルートを追跡し、不安定就労層の労働市場の特徴をみた。長浜の日系ブラジル人は、(a) 愛知や静岡など時給の高い地域へ転職する者と、(b) 家族とともに長期間滞在する者に分かれている。日系ブラジル人の多くは派遣業者の社宅に集住し、送迎バスで派遣先企業に通勤している。近隣の日本人と

の接点はなく、短期間の出稼ぎ労働者である。ただし、家族居住する日系ブラジル人の中には、生活の本拠地を長浜にする者が出てきている。彼らは長浜の中小企業に直接雇用されるようになり、市内のアパートや公営住宅に住むようになってきている。今後、日系ブラジル人が長浜に定住する可能性がある。

#### (2) 長浜最大手の派遣業A社雇用の日系ブラジル人～質問紙調査から～

A社に雇用される日系ブラジル人の特徴の1つは、その流動性の高さである。このことは全国の年齢別人口構成とA社雇用の日系ブラジル人の年齢別人口構成とを比べると浮かび上がる。しかし本調査では、当該の日系ブラジル人のうち、流動性がそれほど高くない者たちも観測できた。特に家族と同居し、生活の基盤が長浜に移転している日系ブラジル人は、いわゆる単身でデカセギに来ている人々に比べて、長期的・定住的な傾向を示すことが確認された。例えば、長浜での滞在予定は、単身者より家族と同居する人々の方が長期的であった。また派遣会社が行う生活密着型のサービスについても単身者より家族と同居する人々の方が高い評価を与えていた。加えて長浜市に対して教育に関する要望を有しているのも家族と同居する人々であった。これらの結果は、A社雇用の日系ブラジル人が、流動性の高い単身者層と長浜での生活を長期化させている家族同居層とに分化してきていることを裏付けるものであった。そして後者の家族同居層は、生活基盤の日本への移転が進めば進むほど、「なし崩し」的に定住化する可能性が高まるように思われる。

#### コメント

近藤敏夫・長光太志 両氏報告「日系ブラジル人労働者の就労スタイルと生活スタイル —滋賀県長浜市の事例—」へのコメント 小松史朗（立命館大学非常勤講師）

本報告では、1990年代以降の滋賀県長浜市における日系ブラジル人労働者を中心とした外国人労働者の流出の実態に関する人口統計分析、これら外国人労働者の日本国内での就労及び生活の実態についてのアンケート及び面接調査を通じた分析が紹介された。近藤報告は、長光報告が主な対象となった。長浜市が事例として取り上げられた理由は、同市には日系ブラジル人労働者をブラジルから調達する人材派遣・請負会社の拠点とそうした労働力を需要し受け入れてきた数多くの製造業企業が存在することにある。

まずは、両報告の概要を紹介する。長浜市では、数多くの製造業企業が存在することから安価かつ豊富な労働力に対する需要が常に多く存在してきたため、製造業企業が独自に日系ブラジル人労働者を現地から調達・雇用して自社の業務に就労させるケースが古くから見られた。そして、そうした製造業企業の中から、調達した日系ブラジル人労働者を他社に仲介する人材派遣・請負業務を本業として展開する企業が登場し、事業を拡大していった。しかしながら、長浜地域の企業では福利厚生には力を入れるものの時給水準は東海地域の自動車メーカーなどに比べて低い傾向があるため、特に短期出稼ぎ指向が強い単身の若年労働者の多くは、短期間で長浜地域を離れて東海地域などに移動する傾向がある。一方、長期定住指向の強い家族持ちの労働者は、長浜地域に定住する傾向が見られる。こうしたことから、長浜地域は、日本で就労する日系ブラジル人労働力の供給拠点にもなっている可能性が高い。

短期出稼ぎ指向の強い若年労働者層と長期定住指向の強い家族持ち層のうち長期定住指向層に関しては、彼らが主体的に選択した結果生じたものとは必ずしも言えない。なぜならば、多くの労働者が当初は短期出稼ぎ指向であったにもかかわらず、日本企業から受け取る労働賃金の低さや日本の物価水準の高さなどから帰国するための渡航費を稼ぐこともままならず、なし崩し的に日本に長期定住せざるを得なくなるケースが多いからである。そして、その傾向は、帰国のための渡航費や日

本での滞在費がかさみがちな家族持ち層により強く現れる。

一方、雇用者側の事情としては、少子化で若年労働力不足が深刻である一方で日本国内からの出稼ぎ労働力を雇用すると人件費が高つくことから、賃金水準が日本人に比べて低く、体力もあり比較的勤勉とされ、一定の供給が見込める若年層の日系ブラジル人労働力に対する需要は大きい。しかしながら、雇用者側のこうした事情は、日系ブラジル人労働者を就労ビザが切れた後も実質的に雇用し続ける不法残留の温床ともなってきた。

評者は、報告内容とテーマに対して次のような感想を持つ。戦後日本の生産第一主義がもたらした国内人口構成の少子高齢化により、近年、日本国における外国人労働力の受け入れが急増している。このことは、一面では、母国で働くよりも相対的に高い賃金を短期間で稼ぎたい外国人出稼ぎ労働力と日本人労働力よりも相対的に低い賃金でよく働くブラジル人労働力に対する需要を持つ日本企業の双方に利益をもたらしている。

しかしながら、外国人労働力の受け入れは、次のような問題も顕在化させている。今回の報告でも明らかになったように、日本で就労する外国人労働者には、日本企業から受け取る賃金の低さや日本での滞在費の高さなどからなし崩し的に日本での長期滞在を余儀なくされている層も多い。こうした外国人労働者を社会保険に加入させている日本企業は1割に満たないという。このように、現在、日本では、日本で生まれ育ったそうした外国人労働者の子息に対する保護・受け入れ体制が整備されているとは言い難い。

すなわち、国内に長期残留する外国人労働者の多くは、低賃金不安定就労に従事して社会保険にも加入できず、日本社会にも溶け込めきれていないのが実情である。さらには、こうした実情に対して「告発」を行おうにも、極めて流動的な雇用状況に置かれることが多い外国人労働者達には、労働組合活動などを通して団結をする素地に乏しい。

近年、社会保障の切り捨てと各種労働法制の規制緩和などにより、日本でも階層格差が顕著に拡大しつつあると言われる。そして、今後も確実に増え続けるであろう日本国内に在留する外国人労働者の多くは、あらたな貧困層として顕在化しつつある。こうした格差は、人心を荒廃させ、治安の悪化、秩序の崩壊など、極めて深刻な事態を招きつつある。

こうした問題を克服していくためには、少子化対策政策の抜本的な拡充、外国人労働者に対する社会保険加入の義務化と違法業者に対する規制の強化、外国人と日本人コミュニティーとの協調・共生のための草の根レベルでの地道かつ長期的な取り組みなど、際限のない数多くの重い課題が山積している。

しかしながら、外国人労働者問題は、今後の日本社会において避けて通ることができない問題である。今後、こうした問題に関しては、学際的な研究と教育をさらに進め、世論を喚起していくことが研究者の使命となるであろう。こうした点からも、今回の近藤・長光報告は、極めて重い示唆を投げかけている。

最後に、両者の今後の研究に対する評者の期待を記す。今回の報告では長浜地域を中心とした外国人労働力の流入状況を中心とした労働市場の分析に主眼が置かれていたが、今後はそこから踏み込んで、こうした外国人労働力の就労・生活実態をめぐる社会的問題性を抽出するのとともに、そうした社会的問題性を克服するための社会政策、社会運動のあり方について検討されることに期待したい。

## 2. 報告要旨

『飯場労働者の労働への意味づけ--建設産業における構造転換の中の下層労働--』

大阪市立大学大学院 渡辺拓也 fujimi@syd.odn.ne.jp

重層下請構造を特徴とする建設産業の末端部で、日雇労働力調達メカニズムの変容、すなわち、寄せ場の縮小・衰退と飯場網の拡大があったと言われている。しかし、大阪の寄せ場・釜ヶ崎では、バブル期には及ばないまでも、相当数の求人があり、労働市場における釜ヶ崎の役割がいかなるものであるかを検討する必要がある。本報告では供給側、つまり労働者の視点からこれを考えたい。

現在の寄せ場は圧倒的な買い手市場であり、<現金>と呼ばれる一日だけの労働契約を好んだ寄せ場の労働者たちも、労働者の派遣業務を営む業者と<契約>と呼ばれる期間契約を結び、飯場と呼ばれる宿舎で寝泊まりしながら就労する形態をとらざるを得ない。つまり、釜ヶ崎の役割を見るには、釜ヶ崎で求人する飯場における労働力のありようを見る必要がある。

本報告で用いられるデータは、報告者の釜ヶ崎の相対求人（路上求人）によって入寮した3つの飯場での、のべ99日間の就労経験から得られたものである。本報告では飯場労働の実態と飯場労働者の労働への意味づけに注目する。

飯場の労働者は大づかみに流動層と固定層の二つに分けられる。流動層は比較的短期の<契約>で出入りし、複数の飯場と寄せ場の往還を繰り返す層で、一つの飯場への定着の意志を持たない。固定層は短い者でも1年、長い者で10年以上といった期間一つの飯場での生活と就労が定着している層である。固定層は仕事の多寡に関わらず確保される飯場の必要最低限の労働力であり、流動層は年度末や夏期の労働力が不足する時期に調整弁として利用される労働力である。

次に飯場労働についてである。飯場労働は一般的に未熟練労働と言われるが、決して素人でも容易に可能となるものではない。飯場労働者が飯場労働を滞りなくこなしていくためには、1) 意識的側面、2) 経験的側面、3) 技術的側面の三つの側面で、習熟しようという取り組みが必要となる。確かに、飯場労働の熟練性は低位にあるかもしれないが、一定程度の習熟が必要とされるし、一定程度の習熟が期待値としており込まれて彼らは雇用されていることに留意しなければならない。

次に、飯場労働者の労働への意味づけについてである。労働現場における飯場労働者に特徴的な規範として、勤勉性と共同性が見られる。労働として低く評価される未熟練労働であるが、彼らは勤勉であること、仕事に出続けることに大きな価値を置いている。また、労働者間で、初心者へのフォロー、「お互いさま」といった意識が、その場でたまたまいっしょになった相手に対しても払われるといった共同性がある。

自ら「プロ」であろうとする飯場労働者の意識があり、これは単に勤勉である以上に、より評価される場所を求める上昇志向にも繋がっている。この上昇志向が飯場労働者の流動性の高さへと帰結していると考えられる。結果として流動性が高まる彼らにとって、飯場との中継点としての釜ヶ崎の意味は大きい。また、彼らの共同性のよすがとして、以前より指摘されている寄せ場の共同性との連続性が考えられる。

こうした労働者の意識と選択は、飯場経営者から見れば人員数調整や労働教育の手間を省ける都合の良いものであり、労働者の意識を絡めとる形で労働力調達メカニズムが形成されていると見る事が出来る。今後、需要側の視点からの研究も進められねばならない。また、寄せ場以外の求人方法を用いる飯場の実態の解明や、飯場を軸に飯場労働を歴史的に「飯場労働論」として把握していく作業などを通して、これらを手がかりにした現在の建設労働力需給の構造全体の解明へと繋がられねばならない。

#### コメント

渡辺報告「飯場労働者の労働への意味づけ—建設産業における構造転換の中の下層労働—」

渡辺報告は、建設産業における日雇労働供給の変化に注目する。従来、建設労働の景気調整弁として機能してきた「寄せ場」の現状と、バブル期以降、「寄せ場」の衰退にともない、「飯場」という宿発施設が労働者供給に大きな役割を果たしている実態を解明しようとする。その手法は、報告者の飯場での就労経験という参与観察、さらに「飯場日記」（報告者の飯場でのメモを元に、調査終了後、フィールドノートを日記形式に構成したもの。）を資料として分析を深化させようというものである。通常の調査手法では見えてこない「下層労働」へのアプローチとして、延べ99日の就労体験という参与観察を実施した報告者の情熱・意欲、さらに「資料」として配布された14日間の「飯場日記」の優れた記録性を高く評価したい。

さて、渡辺報告への私なりのコメントをさせていただきたいが、「寄せ場」や「飯場」について具体的な調査を試みた経験は皆無であり（院生時代に日雇労働者への面接調査に参加した程度）、多分に的外れになることをお許しいただきたい。

本報告の論点は、当然ながら論題に記載されている「労働への意味づけ」にある。飯場労働者は、自らの労働をどのように捉え、その意義・価値をどのように意識しているかを顕在化させ、明らかになった「労働への意味づけ」がもたらす世界を解明しようとする。

一般に飯場労働は未熟練労働として理解されるが、飯場労働者自身は、単なる未熟練労働とは捉えていない。そこには「習熟」という意識的、経験的、技術的な熟練が必要とされることを報告者は強調する。この「習熟」の底流に、飯場労働者の「勤勉性」と「共同性」の理念を浮上させ、それらをもって飯場労働への意味づけとする。確かに、飯場労働に一定の「技能」が要求されるであろうし、その内実は就労体験を踏まえた記述であるだけに、説得力がある。「勤勉性」「共同性」の記述にもかなりの共感を覚える。しかし、飯場労働者が自らの労働を「プロ」であろうとする、という意識に光を当てすぎるのは疑問である。渡辺が飯場労働を「専門的未熟練労働」とでもいうべき、とする曖昧な概念を用いらざるを得なかったのは、飯場労働の「習熟」「技能」への拘りではないだろうか。一般に、下位に位置づけられる労働であっても、それによって生活を維持・持続させるには労働にある意味を見出すのが常である。積極的な意味が見失われれば、労働は成り立たない。

「労働への意味づけ」が生み出す帰結として、飯場労働者の高い流動性を導き出すのは論の展開としてスムーズであろう。また、この高い流動性を飯場経営の視点に移し、「都合よく出入りしてくれる存在」として末端労働力を円滑に調達するメカニズムとして看取する報告者の洞察力に確かなものを覚える。飯場労働者の流動性については、就労形態から「固定層」と「流動層」に類別し、両者の意識の違い、両者の関係にも一定の論及はなされているが更なる展開が期待される。そこに必要なのは労働意識の背後にあるキャリアの視点ではなかろうか。飯場労働者の家族歴を含んだ生活分析が加えられることを要望しておきたい。

最後に、「飯場」と「寄せ場」の関係について述べておきたい。報告者は労働者にとって釜ヶ崎とは、「飯場間の中継点」「共同性のよすがとなるアジール」と考えるが、この地区における日雇労働者の激減（読売新聞 2006/1/18 この20年間で4分の1に減少）と高齢化（前掲紙、平均年齢は54.5歳）の実態を考えると、建設産業における日雇労働の供給を「飯場」にシフトせざるを得ない新たな要因が見出せるのではないだろうか。

以上